

## 『ヴェローナの二紳士』における旅

遠藤花子

### 1 はじめに

シェイクスピアの作品の中で「旅する女性」について考察する時、女性が男装して旅をする場面を持つ作品の多さに驚かされる。女性が恋人を求めるなど、目的をもって旅する作品には、*The Two Gentlemen of Verona*, *Cymbeline*, *A Midsummer Night's Dream*, *The Merchant of Venice*, *As You Like It*, *All's Well that Ends Well* などが挙げられ、ほかに夫と一緒に旅をする *Othello*, *The Taming of the Shrew*, *Pericles* などが挙げられる。興味深いのは、ここに挙げた作品の多くが喜劇であるということである。

その中でも『ヴェローナの二紳士』は、主要な登場人物である若い男女が旅をする、終始一貫した旅物語であると言える。すべての登場人物の中で旅をしない人の方が少ないくらいである。物語は、旅に出ることに積極的なヴァレンタイン (Valentine) と、恋人恋しさに旅を拒否するプロテュース (Proteus) の会話に始まり、父親に強制的にヴァレンタインと同じところへ旅に出させられたプロテュースを追いかけて恋人のジュリア (Julia) が旅に出る。全員が落ち着く間もなく、ヴァレンタインがプロテュースの裏切りにあって逃亡し、それをヴァレンタインの恋人シーリア (Celia) が追いかける。追いかけてこの末、ハッピーエンドを迎え、旅も終了したかに見えるが、追いかけてきた大公にヴァレンタインが、最後の台詞 “I will tell you, as we pass along” (5.4.166) とすることによって、劇そのものは幕を閉じるが、登場人物はまだ旅が終わっていないことを示唆している。

だが、『ヴェローナの二紳士』の批評史を見ると、18世紀の批評から現代の批評に至るまで、欠点追求の論考が非常に多いことが分かる。地理上の混乱や筋の問題が浮上しているほか、18世紀の Samuel Johnson は、*Johnson on Shakespeare* の冒頭で、Theobald がこの劇はシェイクスピアの最低の作品であると言った意見や、Upton が手法やスタイルからシェイクスピアの劇である

という証拠が引き出せるものなら、この劇は荷造りして、どこかにいる親許へ送られなければならないと言及したことなどを述べた上で、ジョンソン自身も “When I read this play I cannot but think that I discover both in the serious and ludicrous scenes, the language and sentiments of Shakespeare. … I am yet inclined to believe that it was not very successful” と悲観的な論を述べている (Johnson 72-5)。ほかにも将来における全額支払いを約束して、若きシェイクスピアが打った手付金ともいべき作品であるという Sanders の指摘も見られる。

非難の対象としての論考が多い一方で、やや前向きな意見として、問題は主筋と脇筋の結びつきの曖昧さであると、欠点を論じた上で作品のよさを見出そうとした Wells もいる。また、20世紀後半以降、フェミニズムの観点からジュリアの変装に焦点が当てられているものも幾つか見受けられるが、他の男装する女性が描かれた作品と一体化して述べられた論考がほとんどであり、『ヴェローナの二紳士』を単独で述べたものは少ないことを付加しておくべきであろう。

『ヴェローナの二紳士』は、上演史の点から見ても成功の例は少ない。シェイクスピアの作品として1623年の First Folio の第二作目に収められているが、シェイクスピアの生存中に上演されたという記録はなく、最初の上演は改作も施された1762年と言われている。その後も原作に近いものの上演が試みられたが、観客の反応は芳しくなく、その結果として、結局、シェイクスピアの戯曲中、最も上演記録の少ない作品としてレッテルを貼られたまま現在に至っている。唯一、1821年にオペラ風に改作されたミュージカルが脚光を浴びた程度である。興味深いのは、1970年にフィリップス (Robin Phillips) が、若者の自己探求の旅というテーマを現代風に強調した舞台を演出したことである。

従って、好評を受けることは少なく、あまり日の目をみることのなかった劇であることは間違いなく、確かにテキスト上の問題は多く存在するが、本試論では、当時の旅に関する一般的な認識と『ヴェローナの二紳士』を比較することで、いかに当時の旅に対する概念が作品の中に反映されているかを顕にする。まず、一般的であった男性の旅について論じ、次いでジュリアと当時の旅する女性たちに焦点を当てる。更に、男装して旅した女性たち、及び恋の病と旅との関わりについて言及する。そして『ヴェローナの二紳士』の旅物語としての価値を見出すことで、批判にさらされてきたこの作品の再評価をすることを目的とする。

## 2 『ヴェローナの二紳士』とエリザベス朝における旅

本論に入る前に、作品のもつ問題点である地理上の曖昧さを指摘しておきたい。主要となる登場人物が旅をするのはヴェローナとミラノの間ということになっているが、その道中は、船旅であったり、陸路であったりと矛盾が見られる。ヴェローナとミラノの位置関係からみても船旅が可能であったのか定かではない。Bergeron は、作品の中で4回言及されているヴェローナの地名の曖昧さについて論じている。また、Scheye が (Bergeronはこの意見に賛同していないのだが、) “Two Gentlemen of Milan” というタイトルの中で地理的な問題点を扱っているほか、Leech は、この戯曲においてはタイトル以外に最初の場面がヴェローナで起こっているものだという記述もなく、ヴァレンタイン、プロテュース、ジュリアがヴェローナの出身であるという記述がない (xv) ことを指摘している。更に Carroll も、当時の観客はタイトル以外に1幕における場所を確認する術がなかったこと (76) を明らかにしている。

このように『ヴェローナの二紳士』においては地理的な問題点も存在するにもかかわらず、登場人物の多くが旅をするこの戯曲には、エリザベス朝時代の旅に対する考え方が散見されるのである。『ヴェローナの二紳士』の冒頭、これから旅に出ようとしているヴァレンタインは、恋人と別れたくないがために旅をすることを拒絶しているプロテュースに、自国にいてぼんやり過ごすより、外国の不思議な事物を一緒に見たいものだという。

Were't not affection chains thy tender days  
To the sweet glances of thy honour'd love,  
I rather would entreat thy company  
To see the wonders of the world abroad  
Than (living dully sluggardis'd at home)  
Wear out thy youth with shapeless idleness. (1.1.3-8)

これは、当時の若者の男子が見聞を広めるために旅することが推奨されていたことによるものである。テューダー王朝が始まったころ、特にテューダー王朝の最初の二人の王は、海外の名高い学者や画家を奨励することに熱心であり、彼らはまた、イギリスの卓越した宮廷人のスポンサーとなって、

ヨーロッパの都市、とりわけイタリアの都市に宮廷人を送り出す用意を整えていた。ただ、ヨーロッパへ行かせた目的は、英国独自の芸術や文学や政治理論の洗練度を揺るぎ無いものにするためであった (Hadfield, *Literature* 17) とも言われているが、大陸へ渡り、学問的な知識や技術を身に付けてイギリスへ戻った者たちが、イギリスで活躍していたことは言うまでもない。

旅に出ることは教養人としての証であったため、旅に出ることを拒み、ジュリアを選択したプロテュースが、教養人としての生き方を拒否したことへの罪意識を感じていることは事実である。プロテュースは、ジュリアと旅との間で揺れる心の内を次のように語る。

I leave myself, my friends, and all, for love:  
 Thou, Julia, thou hast metamorphos'd me;  
 Made me neglect my studies, lose my time,  
 War with good counsel, set the world at nought; (1.1.65-8)

プロテュースが自らの決断に迷いを寄せている一方、プロテュースの父アントーニオ (Antonio) は、召使いのパンシーノ (Panthino) に、世の中の風習として、社会的に地位のない人さえも海外に出る時代になっているのに、どうして息子を国内に留めているのかと問われる (1.3.4-16)。パンシーノの意見に同意しつつ、アントーニオは、荒波に打たれることと経験の重要性を次のように述べる。

I have consider'd well his loss of time,  
 And how he cannot be a perfect man,  
 Not being tried and tutor'd in the world:  
 Experience is by industry achiev'd,  
 And perfected by the swift course of time. (1.3.19-23)

そして、有無を言わず、プロテュースをミラノへ送ることを決断する。出発が一旦決まると、準備期間も猶予も与えず、直ぐに旅立たせる。アントーニオの決断の速さに反論する間もなくプロテュースは出発となるが、親にとって子どもを旅させることが求められていたことと、旅の重要性が、ここで再認識させられる。このような旅についての風潮が広まる最中、プロテュースは名誉を捨て、恋を取ろうとしていたのである。プロテュースは父親に強引に旅をするよう促され、ミラノへと旅立つことになるが、旅先で

待ち構えていたのは友を裏切る愛であり、強引に取り計らわれて旅に出たものの、従来の旅の目標から大いに外れていたことは言うまでもない。

当時のイギリス人の「旅行」の概念として、イギリス国内を旅するのではなく（McRae 14）、本格的で且つ有意義な旅行として認められていたのは、海外へ出ること（McRae 179）であった。そのため、16、17世紀の旅行者は、近隣諸国を訪問することが多く、フランス、ドイツ、オランダ、スペイン、そして特に顕著であったのはイタリアである（Hadfield, *Amazons* 41）。パンシーノが述べているように、ある人は戦争へ、ある人は遠くの島を発見するために、ある人は大学で勉強するために（1.3.7-10）、それぞれ目的は異なるが、身分や目的を問わず海外へ出ることが脚光を浴びていた時代である。実際に、「英国は十六世紀の中葉を過ぎてなお、文献の名に値する程の地理文献は殆ど生み出してはいなかったが、それに続く七五年間に地理文献の特異な多様性——旅行記・航海記の集成——を完璧なまでに発展させた」（ペンローズ 387）こともあり、人々の海外への関心が急速に高まっていたのは確かである。

また、「旅行記」という観点から見ても顕著な時代であった。ペンローズが述べているように、「エリザベス時代の初期には幸いにも、価値ある旅行記をフランス語やスペイン語から翻訳して刊行する仕事をした三人の優秀な翻訳家があった」（392）ことや、「ルネッサンス期における英国の旅行・航海文献は、外国文献の翻訳とそれぞれ独立した個人の旅行記という強力な脇役を持った一大集成において、その最高潮に達した」（405）という事実があった。当時大勢の人々が足を運んだ劇場において、戯曲という形で旅する人々を描こうとした劇作家が登場したのも当然のことと言えよう。

旅行記は、地図やイラストが入っていると値段が高かったこともあり、人々の間になかなか浸透しなかったとも言われているが、外国旅行に関する情報はイギリスでも普及していて、長距離に及ぶ旅についての劇は大いに興味を引いていたようである。16世紀終わりには、ロンドン市民の多くにとって、旅行に関する芝居は、劇場において最も観客を満足させるものになっていたのである（Parr 3）。つまり、実際に海外に出ない人も、ロンドンの劇場で芝居を見ながら海外に思いを馳せることができたのである。

シェイクスピアと同時代の戯曲としては、実際に行われた旅に奮起させられ、神話とフィクション、物語と戯曲の相互作用をもつ *The Travels of Three English Brothers* (1607) (Maquerlot and Willems 2) を始め、1600年代前半の

*The Sea Voyage, The Antipodes* などがあり、その他、海外が舞台になっている非常に多くの作品が上演された。これらの作品が生まれた背景として、実際の旅そのものは規制や制限があったが、17世紀の始めまでは“travel writing”はほとんど創作されなかったため、“travel writing”は直接的にはほとんど検閲にかからなかったことも挙げられる (Hadfield, *Literature* 4)。このように“travel writing”という側面からみても、かなり海外旅行の概念がさかんに書かれた時代であり、男性のみならず、女性も海外へと心動かされた時代であったのであろう。

### 3 ジュリアの旅

これまでは、エリザベス朝において、いかに海外へ出ることが重要視されてきたかをみてきたが、それは男性に限ってのことである。旅をすることに対して積極的な男性と違い、女性の旅はかなり否定的にとらえられていることが多くある。これは、ジュリアと侍女のルーセッタ (Lucetta) の会話からも読み取ることができる。

ジュリアが旅に出ることを告げると、ルーセッタは旅は辛く長いものだと言う。また、プロテュースのジュリアへの愛が終わるや否や、ジュリアは旅に出ることを決断する。プロテュースが既に心変わりしているとは知らず、ジュリアは、どうすればプロテュースに会いに行ける旅ができるか教えてほしい (“To lesson me, and tell me some good mean / How with my honour I may undertake / A journey to my loving Proteus” (2.7.5-7)) とルーセッタに懇願する。ルーセッタはジュリアに、プロテュースはジュリアが会いに行っても喜ぶか分からないから止めるように (“I fear me he will scarce be pleas'd withal”) と忠告する。ここで観客はルーセッタの言っていることが正しいことを悟るが、同時に男性の気楽な旅と違い、女性の旅が肉体的・精神的にいかに困難なものであるかを示唆している。女性の一人旅という実際に起こりうる危険性と、プロテュースの心が既にジュリアから離れていることからくるジュリアの前途多難な旅を、観客は目の当たりに想像するのである。この先は、恋の行方がわからないことに加え、道中の危険も考慮しながら、また、ジュリアの行く末を案じながら話の展開を追うことになる。

ジュリアは一人で旅に出る決心をしながら、“how will the world repute me / For undertaking so unstaid a journey?” (2.7.59-60) と言って世間の噂を気

にしている。世間では、一人で旅に出る女性は無鉄砲な者として、悪口を言われたことをほのめかしている。男性は見聞を広めるために旅は必要なものであったが、女性にとっての旅は、決して肯定的ではなく、むしろ噂の対象となり得るものであったのだ。男女間における旅の概念はかなり対照的であり、旅は男性のすることという考え方が当然であるとみなされていたのである。ジュリアの旅の道中のことは述べられていないが、ジュリアは無事にミラノに到着するや否や<sup>1</sup>、プロテュースがシルヴィアに夢中になっているという現実を知る。ジュリアはプロテュースの心変わりを知り、長旅が無事に果たされたところか、ただ現実をまともに直視しなければならないという事態に陥る。更にジュリアは死んだことにされていて、更なるショックを受ける。

女性が旅に出ることが疎まれた理由の一つとして、当時の理想的な女性像は、Henry Smith (1550?-91) が *A Preparative to Marriage* (1591) の中で述べているように、女性は良き妻になることが望ましく、また良き妻とは、夫を喜ばせ、家庭を上手に守り、物静かで忍耐強いことなのである。そして男性は海外を旅行し、女性は家を守ることが責務であることを強調している。スミスの言葉を借りれば、旅をするのは男性の方であって、女性は家庭でおとなしくしていることが理想であって、この時代において、旅する女性は決して理想的な女性とは言えないことは確かなのである。

しかし、イギリス・ルネッサンス時代に書かれた文学作品の中で旅する女性を模索すると、浮上してくる作品の多さに驚かされる。代表的なものとしては、*The Faerie Queene* 中の旅をする Britomart や Amoret<sup>2</sup> などがいる。また、死んだと思った恋人の遺体を引き取るために男装して旅に出て、そこから更なる大冒険を演じる *The Fair Maid of the West* (初演1610) の Bess Bridges も挙げられる。ベスは海賊となってスペイン艦隊と戦う場面もあるが、ちょうど女性の戦士が目立ち始めた時代でもあり、社会ではエリザベス女王崇拝とともに勇敢な女性戦士を描く習慣や、実際に軍隊の中での女性騎士の活躍も認められつつあった (Lynn 8) ことは大いに興味深い。

また、女性が書き残したいいくつかの“Female Warrior Ballads”も見受けられる。最も初期の頃の作品は17世紀に変わる頃に印刷された形で現れたものである。1595年の少年の姿で海外へ行く女性を描写した詩や、ちょうど同じ頃創作され、センセーションを巻き起こした Female Warrior Ballad として評価されている *Mary Ambree* など (Dugaw 31-42)、従来の女性の姿から外

れた勇ましい女性の姿も、女性によって書かれていたことは注目に値する。また、Ballad の讀えられるべき中核をなす点は、ヒロインの manly leadership にあるとされている。作品の中に、“active, decisive, hot-tempered, charismatic” (Dugaw 40) といった性格を持ち合わせた女性たちの活躍が描かれることで、女性たちによる旅をアピールすることに成功したと言える。

しかし、女性が一人で旅をすることが賛成されないことだったにもかかわらず、戯曲の中で恋人に会いに行くために苦勞を惜しまずに旅する女性たちは皆、自らの手で幸せをつかんでいる傾向にある。ジュリアもプロテュースの裏切りを目の当たりにするが、最終的には自らの手で自らの思いを遂げる。恋人を追いかけることをしなかった例として *Romeo and Juliet* では、追放になったロミオに対して心を痛めたジュリエットが惨めな死を遂げることになった。ジュリアが恋人を思うだけでなく、自分の信念を通すために旅に出たように、自分の信念と意志を持って旅に出たことが、その後の人生に繋がってゆくことを示唆している。

#### 4 旅と男装

旅する女性たちに最も顕著に見られたのが男装である。ルーセッタに、どんな服装で旅をするのか (“But in what habit will you go along?” (2.7.39)) と聞かれ、ジュリアは、みだらな男に遭わないように女の姿はしたくない (“Not like a woman, for I would prevent / The loose encounters of lascivious men” (2.7.40-1)) と答える。ジュリアが言っているように、女性が安全に旅をするには、男装することが最良の手段だったのである。そうでなければ、シルヴィアがヴァレンタインを追いかける時に、道中の危険を案じてエグラモーを同伴にしたように、同伴者が必要だったのである。また、ジュリアは「評判のいい小姓」(“well-reputed page” (2.7.43)) になることを選択する。しかし、髪の毛は切らずに結ぶ (“I’ll knit it up in silken strings, / With twenty odd-conceited true-love knots” (2.7.45-6)) と述べている。ここには髪の毛を切りたくないという女性の表れが出ている。彼女は完全に少年になりきれず、またプロテュースの恋人としての自分自身を捨て切れずにいる。

ジュリアは最後のシーンを小姓の姿のまま迎える。二組 (ヴァレンタインとシルヴィア、プロテュースとジュリア) の結婚がまとまり、それからミラノへ戻る旅が始まるところでストーリーは終了するが、ジュリアがもう暫



く小姓のまま過ごすことが予期される。ジュリアは、プロテュースの愛を勝ち取るという旅の目的は果たしたが、服装は男のままであり、彼女にとっての旅が本当に終わったのか疑問が残る。まだ旅が続く気配を残しているのは、彼女にとっての人生の旅の出発点であることも物語っているかのようである。

実際に、この時代の作品を見回して見ると、非常に多くの作品において男装が見られる。先に述べてきた作品の中で、一人で旅する女性たちのほとんどは男装していると言っても過言ではない。男装は、旅する女性たちの危険回避の手段であると同時に、象徴でもあったのである。しかし、John Lyly の *Gallathea* にみられる男装は、1580年代においては珍しいものであった (“Lyly’s use of the cross-gender disguise is rare for the mid-1580s and does not recur in his later works” (Wixson 248)) と述べられているため、旅物語は盛んであっても、戯曲の中において、旅する女性はこの頃始まったことが伺える。男装は戯曲の中における手法の一つとして、シェイクスピアの時代に確立されたと言える。Berek は、シェイクスピアと同時代の劇作家である Francis Beaumont と John Fletcher の描く cross-dressing はシェイクスピアの真似であるとする論考の中で、シェイクスピアの作品と、バーモントとフレッチャーによる作品に登場する男装する女性の違いについて、次のように述べている。

While cross-dressing in Shakespeare is often a strategy for enhancing a woman’s ability to discover her own mind, cross-dressing in Beaumont and Fletcher sometimes enacts a male fantasy about woman’s unthreatening devotion to men and sometimes enacts a parallel fantasy (360).

ベリックは更に、現在我々が “gender” や “sexuality” と呼ぶ関係の、その間にあるものとしてのジェンダー・ルールは17世紀の間に変化し、そして劇場はそのような変化を反映させ、創出する手助けをする場所であった、と述べている (360)。

文学作品において、男装する女性は、大抵、美男子で魅力的な若者であり、出会う女性の恋愛の対象になる (Dekker and de Pol 16) とあるが、当時の劇場においては、役者はすべて男性のみであったため、女性は少年俳優によって演じられていた。そのため、少年俳優が女性の役を演じ、その女性が少年になるという、少年が従来のに戻って演技をしていたことになる。しかし、

ここに存在するメタシアター的な要素は単なる性の逆転ではなく、活動的な女性の姿も同時に映していたとも言える。

エリザベス朝時代（16世紀後半）は、「男性の女性化もしくは女性の男性化が話題になる時代」（深井 62）であったと述べられている通り、男装はもはや珍しいものではなく、戯曲の中で紹介されるのは珍しくても、『ヴェローナの二紳士』が書かれた頃にはありふれたものであったのだ。異なる性になることで、異なる性の人のする旅をしようとする文化現象にとどまらず、行動力で男をあっと言わせるようなことをやり遂げた女性たちがいたことは注目に値する。こういった男性的な女性たちが人知れず社会に存在していたことは興味深い。単に当時の舞台役者が男性のみで、少年になるという都合の良さから男になっているのではなく、身分も性も捨てて行動を起こした女性たちがハッピーエンドを支える源となっているのではないだろうか。いわば、男装も旅も、幸せをつかみ取るために女性に課せられた使命であったとも言えるだろう。

しかし、男装そのものは、旅の間の安全のためにするだけでなく、日常生活において風変わりな人が男装をしていたという事実もある。ピューリタンの観点から、服装倒錯は神の意にそむくという意味でかなり危険なことであった（Shapiro 145）とも言われていた。16世紀後半、男装した女性が告発されて裁判沙汰になったケースや芝居の中の男装シーンが検閲にさらされたこともあった（Vern L. and Bonnie Bullough 75）という。それゆえ、芝居の中における男装を快く思わないピューリタンが、芝居に脅迫的な攻撃をしていたことは想像に難くない。

とは言うものの、エリザベス朝時代に女性の間で流行した男装は、その後更に勢いを増していく。1600年代後半になると、旅の安全のため以外の場面、例えば、カーニバルの期間中の仮装や普段のおしゃれ、あるいは犯罪のための手段としても利用された。18世紀半ばになると、イギリスの出版社は、男性に変装することや、男性としてもっともらしく過ごす女性についての非常に多くの散文形式の物語の記事を大量に出版（Braunschneider 211）するに至る。更に時代が進むと、男性であることの方が都合がいいという理由から、男装してイスラム国へ乗り込んだ Jane Dieulafoy（1851-1916）や、中東へ行った Sarah Hobson（1947-）など、男装をして海外に出て、自分の意志を貫こうと努力する多くの女性たちが登場する（Koo 19-34）。シェイクスピアの時代に男装して旅をした女性たちが、後の旅する女性たちに大いに影響を与え

ていることは指摘しておくべきであろう。

## 5 恋の病と地中海性気質と旅

またシェイクスピアの作品の中で、男装で旅する女性たちは lovesickness に苦しんでいた傾向にある。ジュリアも燃える心を “Didst thou but know the inly touch of love, / Thou wouldst as soon go kindle fire with snow / As seek to quench the fire of love with words” (2.7.18-20) と言うなど、旅に出る前は落ち着きを失い、感情的になっている。しかし、ミラノに到着するや、ジュリアはふさぎ込み、冷静な行動が目立っている。人間の性格（気質）は体液の量に基づいて決められていたというイギリス・ルネッサンス時代に最も重んじられていた医学論<sup>3</sup>に当てはめて考察すると、ジュリアは旅をすることによって、体液のバランスが変化したことを裏付けできるのではないだろうか。

ジュリアとシルヴィアは恋の病のために旅に出発する決心をするが、ヴァレンタインとプロテュースは旅先で恋の病に取り憑かれる。当時の病気は大概、体液の不釣り合いによって生じるものとされていたが、恋の病について Neely は、温暖な気候の住民はホットな状態にあり、それゆえ恋の病にもかかりやすい (“Hot Blood” 58) ものであることを言及している。だが、ニーリーは、『十二夜』と『お気に召すまま』の “lovesickness” についての論考の中で、2世紀から17世紀まで続いた医学的伝統において、恋の病は “the melancholy humor” と関連があると述べている (Neely, “Lovesickness” 279)。

一般的に女性は黒胆汁と粘液が多い性格、男性は血液と黄胆汁が多い性格であるという考え方が定着していたが、舞台をイタリアにおくことによって、地中海性の熱が体内にまで浸透し、体内の温度が上昇することによって女性も熱狂的な恋に陥りやすくなっていると考えられる。実際に、シェイクスピアが書いたとされる37の戯曲のうち、22作品においてイタリアが舞台となっているが、そのなかで、女性が恋の病に取り憑かれる戯曲のほとんどは、イタリアが舞台の作品に含まれている。確かに、イギリスやデンマークが舞台になっている *King Lear* や *Hamlet* といった作品に登場する女性たちには、イタリアが舞台となっている作品の女性たちのような熱狂的で行動的な面は見られない。Lovesickness に耐えることができず、恋人を求めて自ら旅をした女性たちの強い意志と行動力は、すべて地中海性気候に起因していると言える。男装も当時の世を反映させているが、舞台は lovesickness を起こしや

すいイタリアであり、イタリアは偽善的行為や抑止力が解消されるような、また、北方からの旅人が愛や芸術や魂を見つけるような暖かな場所である (D'Amico 174) ことから、女性の登場人物の積極性につながっていると考えられる。

逆に、常識から逸脱した男性的な情熱を持つ女性を描くには、舞台をイタリアにする必要があったとも考えられる。シェイクスピアにみられる地中海性気質の女性たちは、寒さと湿気を伴うイギリスから離れる事で、女性が従来保持していると考えられていた冷静で湿っぽい(感傷的な)性格を保ちつつ、暖かい気候により、熱を帯びて男性的な行動力を持つ性格になっている傾向にある。男装をしているものの、ミラノに到着したジュリアは、プロテュースへの一途な愛を感情的にならずに理性的に観察する。これは、ジュリアがミラノへ旅する過程で、彼女の体内の温度が冷やされ、女性らしい気質と冷静さを取り戻したためと言ってよい。

女性はもともと melancholy humor が多く、lovesickness になりやすい体質であるが、ここに地中海性の温暖な気候が伴うと、むしろ情熱的になり、その女性たちの温まった血液が、彼女たちの旅を手伝っていると言える。ここに lovesickness に陥った女性を旅する気にさせた原因の一つを、ジュリアとシルヴィアの行動の中に読み取ることができるのである。女性が男性的な気質を持ったことこそ、旅をする気にさせたのであり、時には少年の姿をして旅をし、旅の結果、自らの愛を掴み取ったとも言えることができるだろう。

旅は見聞を広めるという目的のほか、現在直面している現実から逃避するという目的もある。追放であったり、脱走であったりと、自らの意志によらずに旅を強いられることもあるが、旅は一つの場所にはない新しい世界へと導くものであり、移動すれば空気も変わり、体内も変化し得るものである。特に、地中海性の温暖な気候は、体温をはじめ、血液の温度も高くし、事件も起こりやすくなる。じっとしていれば起こらないことも、心と体に変化することで刺激を受け、今までにない世界が開ける。このため、『ヴェローナの二紳士』に登場する若者も、旅により、体内が刺激され、lovesickness に陥ったり、打破したりすることができたと言えるのではないだろうか。

## 6 おわりに

ルネサンスの人々にとって、旅は自己発見の手段でもあり (Bate, 70)、同

時に教養人のステイタス・シンボルにもなっていた。しかし、自由に旅をして教養を身につけられたのは男性のみであって、女性たちの旅は、決して安全とは言えず、受け入れられるものではなかった。そのため、旅は男性以上に強い意志を秘めている女性が、苦しみをはねのけて行うものであった。また、旅は、未知の世界へ踏み出せるだけの体力と知力、更に勇気を備えていた女性にのみ、可能なことであったと言える。

自らの危険を顧みず旅した女性の物語は、ハッピーエンドになることが多い。これは恐怖と不安に打ち勝って旅した女性の結晶であると言える。男装もまた、その強さを見せるためのものであり、外見で弱いものと認められてしまう女性らしさを隠すためのものだったのである。男装は女性の一人旅を可能にした唯一の手段でもあったのである。シェイクスピアや彼の時代の劇作家が、後の時代に女性が自由に旅をするようになる、大事な基礎づくりの時代を築いたといっても過言ではない。

批評史の側面から見ても、パフォーマンス史という側面から見ても、『ヴェローナの二紳士』はあまり高い評価を受けてこなかったのは事実である。しかし、シェイクスピアが描いた旅する女性たちの先駆けとなる二人の女性、ジュリアとシルヴィアこそ、後に続くシェイクスピアの旅する女性登場人物の元となっているのではないだろうか。作品全体を通してみると、男性にとっての旅と女性にとっての旅がどのようなものであったかが理解でき、旅物語としての価値を見出すことは不可能ではない。シェイクスピアの第一作目とも言われているこの『ヴェローナの二紳士』こそ、シェイクスピアの記念すべき“travel writing”なのである。

#### 注

- <sup>1</sup> ジュリアの旅の準備の場面は実際の旅の場面より長い。実際の旅は、途中の苦難は全くなく、ジュリアは突然プロテュースの前に登場する。
- <sup>2</sup> Amoret と Britomart はエリザベス女王の表象としてみなされている。
- <sup>3</sup> 人間は血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁から成り立っていて、血液が多い人は多血質、黄胆汁が多い人は短気、黒胆汁が多い人は憂鬱、粘液が多い人は無気力と分析されていた。また、一般的に病気は、これら四つの体液のバランスが崩れることによって生じるものとされていた。

## Works Cited

- Bate, Jonathan. "The Elizabethans in Italy." *Travel and Drama in Shakespeare's Time*. Ed. Jean-Pierre Maquerlot and Michele Willems. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Berek, Peter. "Cross-Dressing, Gender, and Absolutism in the Beaumont and Fletcher Plays." *Studies in English Literature, 1500-1900*. 44.2 (2004): 359-77.
- Bergeron, David M. "Wherefore Verona in *The Two Gentlemen of Verona*?" *Comparative Drama*. 41.4 (2007/2008): 423-37.
- Braunschneider, Theresa. "Acting the Lover: Gender and Desire in Narratives of Passing Women." *The Eighteenth Century*. 45.3 (2004): 211-97.
- Bullough, Vern L. and Bonnie Bullough. "Playing with Gender: Cross Dressing in the Sixteenth and Seventeenth Centuries." *Cross Dressing, Sex, and Gender*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1993.
- Carroll, William C. "Introduction." *The Two Gentlemen of Verona*. London: Thompson, 2004.
- Dekker, Rudolf M. and Lotte C. van de Pol. *The Tradition of Female Transvestism in Early Modern Europe*. Basingstoke: Macmillan, 1989.
- Dugaw, Dianne. *Warrior Women and Popular Balladry, 1650-1850*. Chicago and London: The U of Chicago P, 1989.
- D'Amico, Jack. *Shakespeare and Italy: The City and the Stage*. Gainesville: UP of Florida, 2001.
- Gillies, John. *Shakespeare and the Geography of Difference*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Hadfield, Andrew, ed. *Amazons, Savages, and Machiavels: Travel and Colonial Writing in English, 1550-1630: An Anthology*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Hadfield, Andrew. *Literature, Travel, and Colonial Writing in the English Renaissance 1545-1625*. Oxford: Clarendon, 1998.
- Johnson, Samuel. *Johnson on Shakespeare*. Ed. Walter Raleigh. Oxford: Oxford UP, 1908.
- Koo, Halia. "(Wo)men Travellers: Physical and Narrative Boundaries." *Mosaic*. 39.2 (2006): 19-34.
- Leech, Clifford. "Introduction." *The Two Gentlemen of Verona*. London: Methuen, 1969.
- Lynn, John A. *Women, Armies, and Warfare in Early Modern Europe*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.
- McRae, Andrew. *Literature and Domestic Travel in Early Modern England*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Maquerlot, Jean-Pierre and Michele Willems. *Travel and Drama in Shakespeare's Time*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Neely, Carol Thomas. "Hot Blood: Estranging Mediterranean Bodies in Early Modern Medical

- and Dramatic Texts.” *Diseases, Diagnosis, and Cure on the Early Modern Stage*. Ed. Stephanie Moss and Kaara L. Peterson. Aldershot: Ashgate, 2004.
- … “Lovesickness, Gender, and Subjectivity: *Twelfth Night and As You Like It*.” *A Feminist Companion to Shakespeare*. Ed. Dymphna Callaghan. Oxford: Blackwell, 2000.
- Parr, Anthony. “Introduction.” *Three Renaissance Travel Plays: The Travels of the Three English Brothers; The Sea Voyage; The Antipodes*. Manchester: Manchester UP, 1995.
- Paster, Gail Kern. *The Idea of the City in the Age of Shakespeare*. Athens: U of Georgia P, 1985.
- Potter, Lois. “Pirates and ‘Turning Turk’ in Renaissance drama.” *Travel and Drama in Shakespeare’s Time*. Ed. Jean-Pierre Maquerlot and Michele Willems. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Scheye, Thomas E. “Two Gentlemen of Milan.” *Shakespeare Studies*. 7 (1974): 11-23.
- Shakespeare, William. *The Two Gentlemen of Verona*. Ed. Clifford Leech. Surrey: Thomas, 1998.
- Shapiro, Michel. “Anxieties of Intimacy: *Twelfth Night*.” *Gender in Play on the Shakespearean Stage: Boy Heroines and Female Pages*. Ann Arbor: The U of Michigan P, 1994.
- Smith, Henry. *A preparative to mariage The summe whereof was spoken at a contract, and enlarged after*. 1591.
- Wixson, Christopher. “Cross-Dressing and John Lyly’s *Gallathea*.” *Studies in English Literature, 1500-1900*. 41.2 (2001): 241-56.
- 深井晃子 『世界服飾史』 美術出版社、1998。
- ベンローズ・ボイス 『大航海時代——旅と発見の二世紀』 荒尾克己訳 筑摩書房、1985。